（別紙様式）

令和６年度かながわ学びづくり実践研究推進校　実践報告

茅ヶ崎市立赤羽根中学校

研究テーマ：身に付けさせたい力を意識した学校教育と小中９年間で育む学びの風土
～「協同的探究学習」と「赤中スタンダード」の実践を通して～

１　実践の目的

赤羽根中学校は、９年前に、現在の校内研究の中心の考え方となる「身に付けさせたい力を意識した授業づくり」をメインテーマとした授業づくりの取り組みを開始した。

令和元年度からは、小・中９年間で子どもの成長を組織的・計画的に支える教育環境を築いていくことを目指し、同一学区の小和田小学校にも関わっている藤村宣之教授を校内研究の助言者としてお招きしている。

今年度は、授業づくりにとどまらず、学校行事・委員会活動など様々な場面で「身に付けさせたい力」を明確にし、生徒の汎用的能力を育成していきたいという思いから研究のメインテーマを「授業づくり」から「学校教育」に変更し研究実践を行っている。

２　実践の内容

（１）授業研究会

本校は、年３回の授業研究会を実施している。教科会での指導案検討を踏まえ、事前研究会として各研究グループでの授業検討を行うことで、教科を超えて授業づくりに関する考え方を共有している。研究協議会は、生徒アンケートをもとにした学習者による授業評価を踏まえて、分科会ごとに進めている。ロイロノートを使った協議は、職員のＩＣＴ活用力向上の機会にもなっている。全体会では、小・中が連携して９年間で児童・生徒を育てるという観点から、その取り組みの成果と課題について、藤村教授より助言を頂きながら研究を進めている。

また、小和田小学校で行われている年６回の校内研究会も含めた延べ９回の授業研究会で、小中の職員が互いに授業参観を行い、授業づくりや子どもの様子についての情報共有を日常的に行っている。

（小学校の職員も参加している授業研究会の様子）

（２）協同的探究学習の活用

藤村教授は、「できる学力」と「わかる学力」という学力の心理的モデルをもとに、日本の子どもは「できる学力」（知識・技能）の習得は相対的に得意だが「わかる学力」（思考力・判断力・表現力）を身に付けることが苦手という特徴があることを、自己肯定感の低さと関連付けて課題としている。

本校では、「わかる学力」を身に付け、「自己肯定感」を高める有効な手法として、次に示す内容を職員で共有し、協同的探究学習を活用し、授業づくりを行っている。

①非定型の「導入問題」の提示

非定型とは解き方・考え方が一つに定まらない、多様な考え方が可能という意味である。導入問題では全員が取り組めて、考えを持つことができる課題設定を行うことがポイントである。これは安易に難易度をやさしくするということではなく、非定型であることを指す。同時に生徒の興味・関心が高まり、やってみようと思える発問の工夫も重要である。

②個別探究

導入問題についての個別探究を行う。先に示したように全員が考えを持ち、後に考えを伝えあう活動ができるよう、時間設定や記述等の方法についての工夫を行う。

③協同探究

グループやクラスでの意見交換をする。ペア・グループ活動だけを行うのではなく、全体共有の場を設定することがポイントである。全体共有の場では生徒の言葉・考えを板書に残し、多様な意見同士の関連づけを行う中で共通点や違いを知り、理解を深めていくと同時に考えを認めてもらえた経験から生徒の自己肯定感を育みたい。

（生徒の考えを認め、思考をつなげるための板書の工夫）

④個別探究（非定型の「展開問題」の提示）

授業や単元の終末に「振り返り」として文章を書かせるのではなく、「展開問題」を設定し、もう一度個人に「問い」を投げかけ、自分の力でできるようになったかを確認する。「展開問題」とは①～③で学んだことを活かして取り組める、やや発展的な問題となっていることや「導入問題」で考えた自分の思考との変容に気付かせることがポイントである。

（３）赤中スタンダードの策定・実施

本校ではみんなが授業に参加できる環境を整えるために、ユニバーサルデザインの実践を意識して授業づくりに取り組んでいる。学校環境・学習環境・指導方法の３つの観点から、本校の実態に合わせたスタンダードづくりを行い、共通の認識を持ち、組織的に教育活動を行っている。これは、積み重ねてきた校内研究の成果と生徒を育てるための共通の視点等を新しく本校に赴任したメンバーにも継承されることも目的とした取組である。

① 学校環境

教育活動を通して生徒の様子を見取り、「学習面」「生活面」「コミュニケーション」の視点で個別支援の体制についての共通認識を図る。学校生活の中心である授業を通して、生徒のそれぞれの課題を改善する手立てを組織的に考えるために、研究推進委員に教育相談コーディネーターが所属していることも本校の校内研究の特徴である。

②学習環境

視覚的な刺激の少ない教室前面の環境や指示の仕方等について、職員・生徒で共通の

認識を確認している。指導者が言葉にして説明しなくても、生徒が自らの適切な行動を選択し、自然な形で行動が完了することができるよう、視覚的支援やルールの明確化を意識し、落ち着いて生活、学習に取り組める環境づくりに努めている。

③指導方法

４月～体育祭（５月）までと９月～合唱祭（１０月）までのそれぞれの期間に「赤中スタンダード強化月間」を実施している。

この期間では学習環境として、視覚的に刺激の少ない教室前面の環境や指示の仕方等について職員・生徒で共通の認識を確認し環境を整えている。また、「生徒同士が考えを伝え合い、深め合う」学校教育活動の質を高めるために「あたたかな聴き方」「やさしい話し方」の指導を行っている。生徒主体で学校行事を運営している本校では、授業での協同的探究学習だけでなく、様々な教育活動を通してコミュニケーションスキルの育成を行っている。

「あたたかな聴き方」「やさしい話し方」を実現するために

聴き方	STEP	話し方
自分の考えを深めたり広めたりするつもりで聴く。	6	日常生活などの経験をもとに自分の考えを話す。
自分の考えと比べながら聴く。	5	人の考えや意見につなげて話す。
話し手の言いたいことを分かろうとして聴く。	4	結論から言い、理由（根拠）を明らかにする。
話を最後まで聴く。	3	聞き手の反応を確かめながら話す。
うなずいたりつぶやいたりして聴く。	2	みんなに聞こえるような声の大きさで話す。
話す人の方を見て聴く。	1	みんなの方を向いて話す。

（全教室に掲示しているコミュニケーションスキル表）

３　実践の成果と課題

今年度は「小中９年間で育む学びの風土」を築くために、小和田小学校・赤羽根中学校の地域で「どのような子どもを育てたいのか」という思いやそのための手法を共有し続け、共通した理念を基に子どもたちに接していけるよう、年間を通して互いの授業研究会に参加することができた。また、校内研究に関する小・中共通の Google Classroom「小和田小学校・赤羽根中学校校内研究　学びルーム」を作成し、資料の共有等もできる環境を整える等、小中連携を深められた。

前期と後期に実施している生徒アンケートの結果からも「考えを伝え合い、深め合う活動（一人で考える・少人数で話し合う・全体の前で発表する）」という項目ではどの教科でも高い数値で実施できていることがうかがえたことから「協同的探究学習」を活用した授業づくりを組織的に推進することができていると言えるだろう。

４　今後の展開

今後は、小中９年間で子どもたちを育成していくという考え方を定着させ、それぞれの発達段階に応じた「身に付けさせたい力」を共有し、授業づくりを根幹とした学校教育活動全体を通して、子どもたちを組織的・計画的・継続的に育てていきたい。そのためには小中の連携をより深め、協働していく取り組みについて考えていかなければならない。

また、コミュニティ・スクールの考え方にもつながるが、小中の学校教育活動にとどまらず地域として子どもたちにどのような力（資質・能力）を身に付けて育ってほしいかという議論を重ね「地域とともにある学校づくり」を進めることで、現状の成果と課題について学校・保護者・地域が共有し、小和田小学校・赤羽根中学校の一小一中の環境を生かした、特色ある教育活動が実現できるだろうと考えている。